



乳量を無理に減じて、 良い事にはならないのです

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社中国支店 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

酪農家さんが時々、冗談気味にこんな話をされる事があります「最近、牛に病気が多くなり、繁殖が悪化しているのは、今の乳牛が分娩直後から乳が出過ぎるからだ。ウチは、乳量はそこでいいので、病気が少なく受胎が良いほうが望ましい。乳量を抑える方法は無いものだろうか?」。この話は「分娩後の乳量増加に餌の採食が追いつかず、負のエネルギーバランスに陥る事が諸悪の根源ならば、乳量を抑制すればその負のバランスが改善し、代謝病や繁殖障害も解決するのでは」との理屈です。エネルギーバランスは基本的に泌乳(出)と採食(入)の引き算であり、実際問題として分娩前後の採食量を高める事は決して簡単ではなく、そのような難しい努力を講じるよりも、餌給与を制限して乳量を抑制した方が『楽に』マイナスを回避できるのでは?という発想は解らなくもありません。

しかし、この考え方に警笛を鳴らす



実験があります。それは分娩後の牛を二群に分け、一方は高エネルギーの餌を多めに、もう一方は低エネルギーの餌を少なめに給与し、泌乳初期の乳量とともに繁殖機能への影響を調べたものです。その結果、前者は平均日乳量が四十一・六kg、後者は三十二・八kgとなり、確かに分娩後の餌制限によって、泌乳量の抑制は可能のようです。しかし高エネルギー群は泌乳量が約九kg高い

ながらも分娩後三週目にはエネルギーバランスがプラスに転じたのに対し、低エネルギー群では七週目まで負の状態が続きました。またそれを裏付けるように卵胞液に含まれるホルモン濃度や、良質卵細胞の数は低エネルギー群の牛の方が低い数値を示し、繁殖機能についても劣る結果となりました。

この実験結果は、飼料内容や給与を制限して乳量を減じさせたとしても、かえってエネルギーバランスの改善を遅らせる事となり、繁殖成績も決して良くはならないことを表しています。つまりはエネルギーバランス改善のためには、餌で乳量を『無理に』抑えるのではなく、やはり高泌乳に見合う餌を十分に与えて摂取量が高める事が重要であり、その方が(乳量は増加するものの?)結果的に繁殖成績の向上につながるのです。

最近では、分娩後の乳量立ち上がりが穏やかで、ピーク以降も緩やかに低下する乳量曲線を持つ「泌乳曲線標準化牛」への育種改良が提言され、分娩後の給与技術の困難さを軽減するとともに、乳期全体の乳量を低下させることなく繁殖性も向上させようとする取り組みが始まりました。しかし牛がどのように改良されても、持つ産乳能力を最大限に発揮させる飼養管理を行うことは不変の原則であり、無理に乳量を低下させるため、分娩後の餌を制限するような手法が推奨される事は、これから将来もまずありえないと思います。